

‘菊桜’ きくざくら

学名：Cerasus Sato-zakura Group ‘Chrysanthemoides’ Miyoshi

春といえば桜、桜といえば‘染井吉野’を思い浮かべる人も多く、これほど日本人に親しまれている樹木はないでしょう。‘染井吉野’が全国各地で見られるようになったのは明治時代になってからです。先に淡紅色の花が咲き、後から若葉が広がるので、花の少ない時期には華やかで人びとの目を引きまします。

一方、菊桜を知る人は数少ないでしょう。菊桜は八重桜の一種ですが植栽されている場所も数も限定的で圧倒的に少ないのです。‘染井吉野’が葉桜になった頃に濃紅色の円盤状の小さい蕾をつけますが同時に赤味を帯びた若葉に隠れて目立ちません。ところが、満開に近づくと球形で大きく、艶やかで優雅な姿は存在感があります。蕾から落花まで形や花の色の変化も味わい深い、玄人好みの桜です。

菊桜は八重桜の一種で菊咲きの桜

栽培品種の桜は花弁数で細かい区分(枚数は研究者によって多少異なる)があり、5枚のものを<一重咲き>、6~10枚を<半八重咲き>、11~100枚を<八重咲き>、100枚以上を<菊咲き>と呼びます。菊咲きには花の中から花が現れる<段咲き>という咲き方もあります。6枚以上のものを総称して八重桜とも呼びます。(『桜』勝木俊雄2015 岩波新書)

菊桜の中の 菊桜

栽培品種名として記載されている菊咲きの桜(菊桜)には‘菊桜’や‘兼六園菊桜’‘米迎寺菊桜’などがあります。‘菊桜’は菊咲きの桜を総称して呼称される菊桜と混同されやすいです。

菊桜は栽培品種であり「種」とは異なる分類体系で用いられる種類名なので、その違いを示すために漢字を一重引用符で括った表記にしています。

尊大におごらず
味わい深い
玄人好みの桜



岡山県立岡山朝日高校の 菊桜



里庄町歴史民俗資料館前の 菊桜

- 花弁数は非常に多く100枚から300枚ほどあります。
- 花弁数が多いのは雄しべが変化したものです。中央部には雄しべも残っていて葉化した雌しべもありますが、共にあまり目立たないです。
- 濃い紅色の蕾から開花するとあざやかな赤色からうすいピンク色になります。段咲きをする、花の中心部の色が濃いなどの特徴もあります。
- 花の大きさは3.5cmから4.5cmです。
- 花のかたちは菊咲きで花全体が球形になります。
- 萼列片は副萼列片(5枚)を含め10枚あります。
- 蕾も開花した小さな花にも見えます。蕾から落花まで約1か月です。
- ヒラヒラと散るのではなく、葉玉のような球形の花が落花します。



佐藤家の 菊桜 から採取した一輪の花弁数



満開に近い 菊桜

菊桜のしくみ



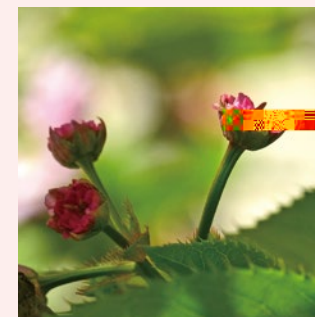
花弁を取り除いた状態

「段咲き」とは花の中にもうひとつ花がある咲き方です。ふつうの花は中心部に雌しべがあって、その外側に雄しべ、花弁、萼列片の順番につく構造になっています。ところが段咲きでは、ひとつ目の花の外側にもう一段雄しべ、花弁、萼列片がついている。(『桜』勝木俊雄2015)

(前略)花が満開になり、実際に菊らしい概観を呈する(後略)。この桜の現象は特徴的で、花弁の異常な増加による花軸の拡大によるもので、これが後に半球状の花托に変化し、全花弁の付着を可能にする。(三好学博士の菊桜の論文(1916)より抜粋)

菊桜のようす

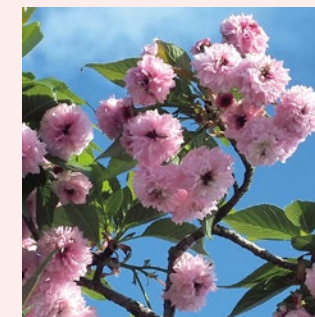
蕾から落花まで



蕾の 菊桜



蕾から開花の 菊桜



満開の 菊桜



落花した 菊桜

菊桜の色の变化



濃紅色(深紅色)
(濃い紅色)

紅色
(あざやかな赤)

紅紫色
(赤紫)

淡紅色
(ピンク)

淡紅白色
(うすいピンク)

岡山県内の 菊桜

岡山県内で見られる六高ゆかりの‘菊桜’は六高記念館、岡山県立岡山朝日高等学校、岡山大学、岡山後楽園、岡山後楽園西側の旭川土手、たけべの森公園、三徳園(以上岡山市) 佐藤清明生家、里庄町歴史民俗資料館、高岡神社、貞利家(以上里庄町) 原田家(倉敷市) 林木育種センター関西育種場(勝央町)にあります。さらに、岡山県立高梁城南高等学校、高梁中央公園(高梁市)、浅野家(奈義町)でも‘菊桜’を確認していますが詳しい来歴はわかってません。(2022年現在)

全国の‘菊桜’

植栽されている‘菊桜’は全国的にも少なく、大変に貴重で、珍しい桜です。約30種類ほどあると言われ、多くは石川県や富山県など北陸で多く確認されています。他には佐賀県、広島県、香川県、兵庫県、大阪市、京都市、岐阜県、新潟県、静岡県、福島県、東京都などでわずかに見ることができます。